



ヨシバの 神



川崎ゆきお

「吉葉会ってご存じですか」

「ヨシバ会」

「はい」

有馬の隠居と政財界から言われている人の邸宅だ。名はあるのだが、誰も本名は言わない。ただ、この隠居、本当に隠居になってしまったようで、今では何の影響力もない。政財界を影で操る黒幕だと言われていたが、現役時代も、そんなことはなかった。ただ、裏に詳しい人だ。そのため、たまに聞きに来る人がいる。これだけでは収入としては少ない。これが黒幕ではなかったことの証明だろう。財はない。

「吉葉会ねえ」

「分かります？」

「ヨシバ、ヨシバ。うんうん、あれかもしれん」

「分かりましたか」

「親睦団体じゃないのかね」

「そうです」

「それで」

「はい、それで、何の集まりなのかが分からず、また、何も活動などしていないように思えるのですが」

「そんな団体はいくらでもあるわい」

「はい。でもたまに吉葉会と相談するとか聞いたことがあるのですが」

「それはおかしい」

「はあ？」

「ヨシバと言う名さえ出さないのが吉葉会だよ」

「そうなんですか」

「君が聞いたのは偽の吉葉会かもしれんし、本物の吉葉会の名を騙っただけかもしれないねえ」

「でも有馬の隠居は、吉葉会をご存じで」

「たまに出て来るが、それは内緒の話のときでね。私も最初は何かの符丁だと思っていたが、少し知り合いに聞いてみると、実体があるらしい」

「どういう会なのですか」

「だから、親睦団体のようなものさ」

「何の」

「それを話すと長い」

「短くお願いします」

「長くても延長料金は取らないさ」

「はい」

「古い」

「だから、吉葉会」

「それなら、古葉会だろ」

「ああ、吉田の吉でした」

「漢字なんて、どうでもいい。それ以前の話だから」

「あああ、はい」

「寄場神社を知っているかね」

「知りません」

「そこがヨシバの本拠地だ」

「いつ頃ですか」

「神話時代かもしれん」

「そっちの系譜ですか」

「違うが、それほど古い」

「はい」

「まあ、言ってみれば帰化人だな。ただ、当時はそんな言い方はない。渡来人は我が国に帰化した人達だろ。その我が国がまだなかった時代に来ておる。だから、帰化するもしないもない。ただ海を渡って来ただけ」

「何処から」

「色々な人が来ていただろうねえ。その中の一つがヨシバだ」

「はい」

「日本での本拠地は山の中、かなり内陸部だ」

「九州ですか」

「全国至る所に居着いているだろう。ヨシバに限らず」

「はい」

「寄場神社に祭られている神様が、さっぱり分からん。系譜が見えん。一応日本の神様のような名は付いておるがな。しかし神社などできたのは最近のことだ。その寄場神社がある場所が彼らの日本での故郷だ。今は寒村どころか、廃村。神社は残っているがね。特に保存しない」

「では、吉葉会は、その連中」

「だから、そう言う先祖の集まりは他にも色々あるよ。吉葉会だけが特別なものじゃない。日本人でも南米なんかへ移住すれば、結束するだろ。それと同じだよ。特に同じ村から行った人達はね」

「どこから来た人達なのですか」

「まあ、南の島からなら、椰子の実のように流れ着いたんだらうねえ。故郷の島を追われたような連中だ。吉葉会は、南国じゃなく東国」

「中国」

「いや、私の聞いた話ではインド」

「インド人」

「日本から見ればインド人だが、多くの種族がいる。ヨシバの日本での安住の地、寄場神社の御神体がそれを証明している」

「象とか、ワニとか、虎とか」

「象じゃないが、濃いお顔の神様だよ。しかし優しいお顔だ」

「そんな人が流れ着いたのですね」

「と言うか、彼らは遊芸の人達なんだ。音曲を奏でたり、踊ったりとか。それで、流れ歩いている人達なんだ」

「その吉葉会が、どうして秘密結社のような」

「さあ、芸人だからねえ。高貴な人達の住むところへ呼ばれたりしたんだらう」

「それです」

「何だい」

「今もそれですよ。吉葉会の人脈が、色々なところと繋がっているようです」

「それは私は知らないなあ」

「有馬の隠居と言われた黒幕でも知らない」と

「だから、私は黒幕じゃなかったんだよ。政財界なんて動かしていませんよ」

「それは隠しておられる」

「それと同じだよ。古葉会も、これは一つの伝説で、それに似たようなものがあったのかもしれませんがね、そんな力はないと思いますよ。私のようにね。ただ、口うるさいわりには口が軽いので、余計なことをつい言ってしまう。それで、口止め料をよく貰いましたよ」

「じゃ、吉葉会はデマだと」

「しかし、ヨシバの人達はいますよ。神社もあるし、御神体もある。今はと言うより、とっくの昔に同化して、ヨシバの人という特徴などないでしょ。ただ、先祖がインドの濃い場所から来たので、少し濃い顔を引き継いでいるかもしれませんなあ」

「ヨシバって、何ですか」

「インドの地名で調べれば、出て来るかもしれませんが、旅芸人の故郷の村と言うだけで、もう残っていないでしょ」

「何故、日本へ流れ着いたのでしょうか」

「東方の果てだからでしょ。それにライバルはまだ来ていないので、新天地だった」

「はい、有り難うございました」

「私の言うことはでまかせが多い」

「いえいえ、参考になりました」

客は封筒を置いて帰った。

有馬の隠居は、その膨らみ具合を見ただけで、ガッカリした。

了